

# 幼児期における健康知識の習得に関する研究（第2報）

— 栄養知識とくに食品の名称について —

群馬女子短大

笠原 賀子

【目的】健康な食生活を送るために栄養のバランスを確保するには、数多くの食品を種類の異なる食品群から幅広く摂取することが大切であり、幼児自身が、それらの食品を適切に選択できるよう教育することが必要である。したがって、本研究は、第1報に引き続き、幼児の健康教育を行う基礎資料を得るための第1段階として、栄養知識とくに食品の名称について調査を実施し、幼児の実態を把握する一助とすることができたので、報告する。

【調査方法】①時期：1989年11月～12月 ②対象：群馬女子短大附属幼稚園園児（年長組）80名（♂44名，♀36名）およびその母親 ③内容：給食の献立に使用されたことのある常用50食品の名称・食経験・嗜好について ④方法：幼児1人1人を個別に面接し、絵カードを提示して、口頭により回答を得る。なお、母親には、質問紙を配布、回収する。

【結果および考察】①食品の名称に関する知識度は、平均「 $29.8 \pm 4.10$ 」食品、経験度は、「 $44.7 \pm 3.05$ 」食品、嗜好度（好き3点，普通2点，嫌い1点）は、「 $2.8 \pm 0.21$ 」点であり、食品により若干異なるが、その分布や、特定の食品に性差がある。②知識の誤答例や嗜好度の違いに、現代の子どもたちを取り巻く食環境の変化がうかがえる。③知識度の高い食品は、経験度も高いが、幼児期においては、食経験があるにも関わらず、その食品（おもに、素材としての食品）を認識していない実態が明らかとなった。④また、幼児の嗜好度は、その知識度とは、あまり関係がないが、母親の嗜好度は、幼児の食品の名称に関する知識度や経験度・嗜好度と関係が深いことから、家庭と園の連携による今後の栄養教育のあり方が示唆される。